



TITLE:

ダムから考える植民地台湾

AUTHOR(S):

清水, 美里; 余, 姿慧

CITATION:

清水, 美里 ...[et al]. ダムから考える植民地台湾. 京都大学アカデミック
デイ2016: ポスター/展示 2016

ISSUE DATE:

2016-09-18

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216757>

RIGHT:

東アジアの歴史認識問題

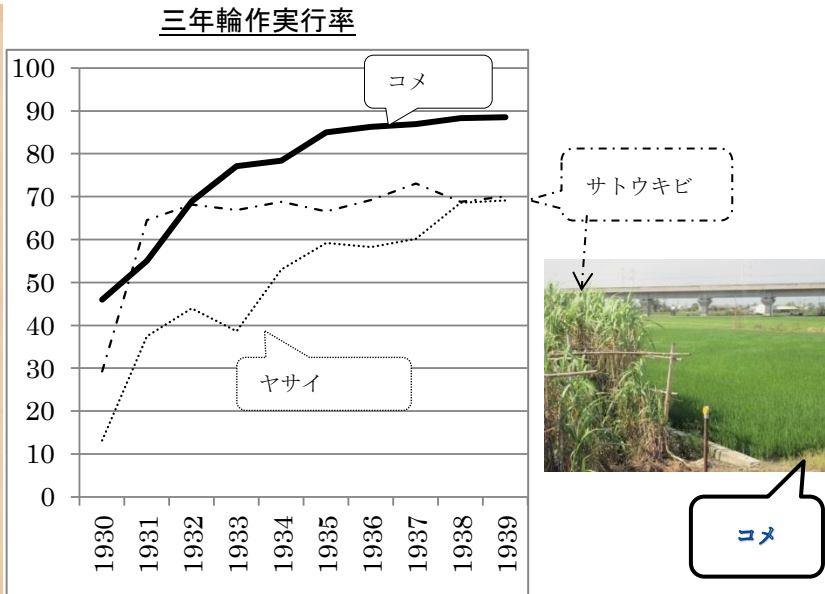
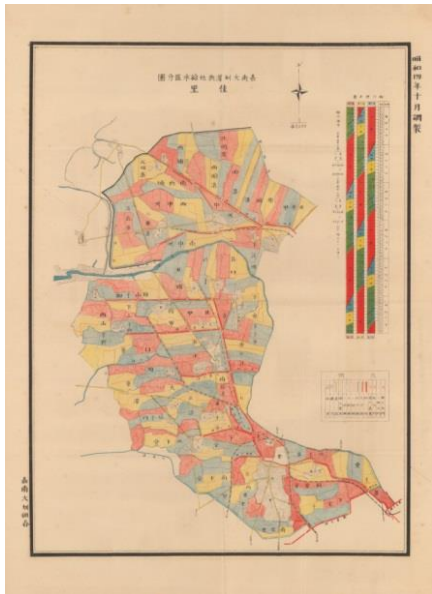
戦前、日本の植民地支配下にあった台湾で建設されたダムは、日本だけでなく台湾や他のアジア地域でも評価が分かれる。

功 戦後の「経済成長」に寄与した／発展を阻害した 罪
罪 植民地を収奪した／近代化した 功

事例 1 嘉南大圳（かなんたいしゅう）灌漑用水事業

1930 年に完成した嘉南大圳の灌漑区域には三年輪作が導入された。三年輪作は栽培作物を指定したため、技術的・経済的問題を生じさせた。

清朝期からの台湾の水利慣行と矛盾していく



嘉南大圳灌漑区域の作物別面積と収穫量

面積(甲)	工事前	1937年	増減
コメ	13,160	49,687	36,527
サトウキビ	31,486	37,137	5,651
その他ヤサイ	89,689	50,736	-38,953
小計	134,335	137,560	3,225
養魚池	8,835	-	-
無収穫地	13,400	-	-
合計	156,570	-	-

総収穫量	工事前	1937年	倍増率
コメ(石)	107,162	784,007	732%
サトウキビ(千斤)	1,379,899	4,648,773	337%
その他ヤサイ(千円)	6,089	10,111	166%

1甲当り収穫量	工事前	1937年	倍増率
コメ(石)	8.14	15.78	194%
サトウキビ(斤)	43,826	125,179	286%
その他ヤサイ(円)	67円89銭	199円28銭	289%

建設費の半分は農民が負担することになっていた。1930 年嘉南大圳完成の年、使用料の不払い運動が起きるが徴収は厳格に進められる。

台南州地主会（劉清風・劉明電・林文樹）が台南州知事（横光吉規）と交渉、翌年の使用料が減額された

台湾農民は三年輪作にも反対したが、三年輪作に対する批判は警察の弾圧を受けた。



事例 1 と 2 の相違点 植民地統治機関の対応の仕方

台湾人の水利をめぐる権利の回復要求に対して警察が出動し強制的に水路を開設していく

在台日本人の経済報酬を希求するパフォーマンスに対して総督府が新聞雑誌記者に「口止め料」を支払う

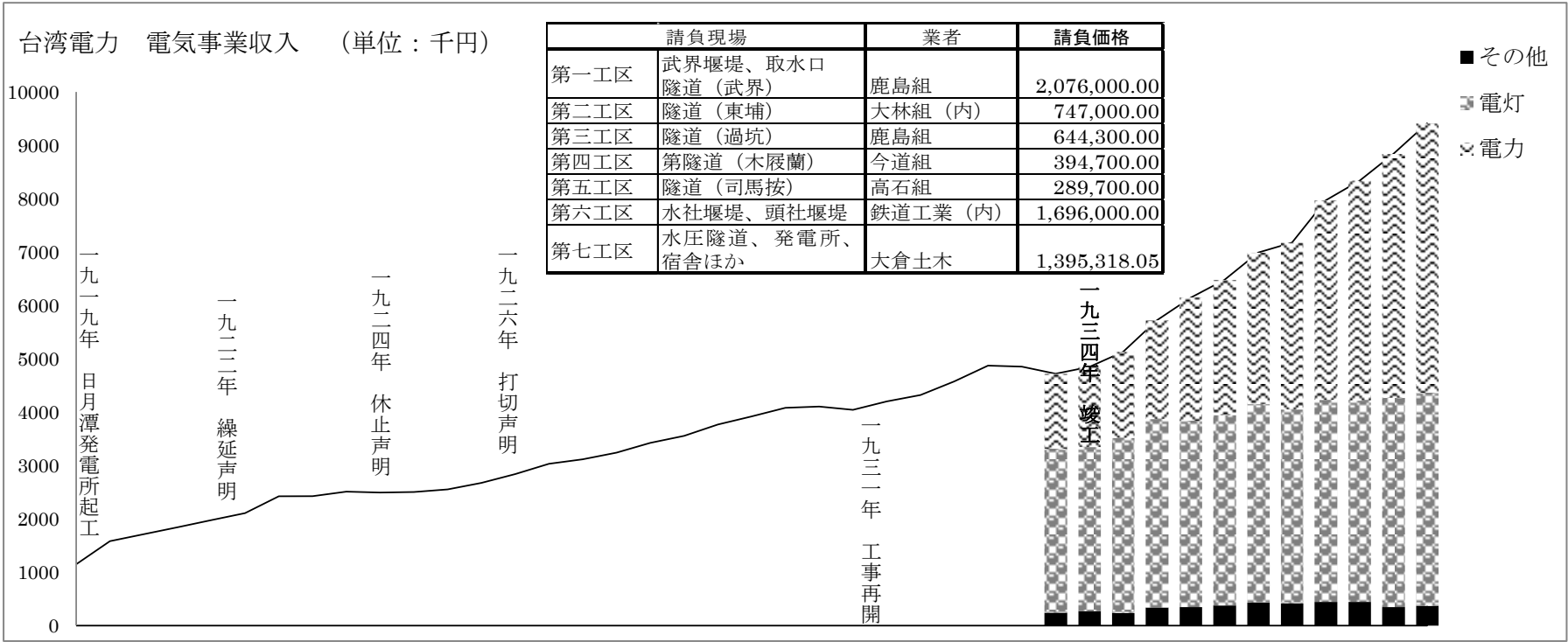
出典：「台湾省嘉南農田水利会档案」（国史館台湾文献館蔵）、『事業概要台湾嘉南大圳組合』（1939）、惜遺「台湾之水利問題」『台湾銀行季刊』（1950. 6）

左のような認識は、①互いに植民地現地社会の状況が「開発」の進展にどのように影響したのかという実証が不在なまま評価が先行される、②純粋な帝国主義の産物だという隠れた前提がある、③台湾の人たちの姿が見えづらい、といった問題がある。近年、『開発』の負の側面への問題関心（「開発原病」「植民地的開発」）から新しい開発事業の考え方（「もう一つの発展」「持続可能な発展」「地域社会の自助」など）が登場している。これらを本研究は植民地史の分析方法として導入する。

事例2 日月潭発電所(じつげつたんはつでんしょ)

当時の政党政治に日月潭工事は政治的カードとして利用されていた。それに怒りを覚えた台湾在住の日本人商工業者が工事の再開を訴えたが

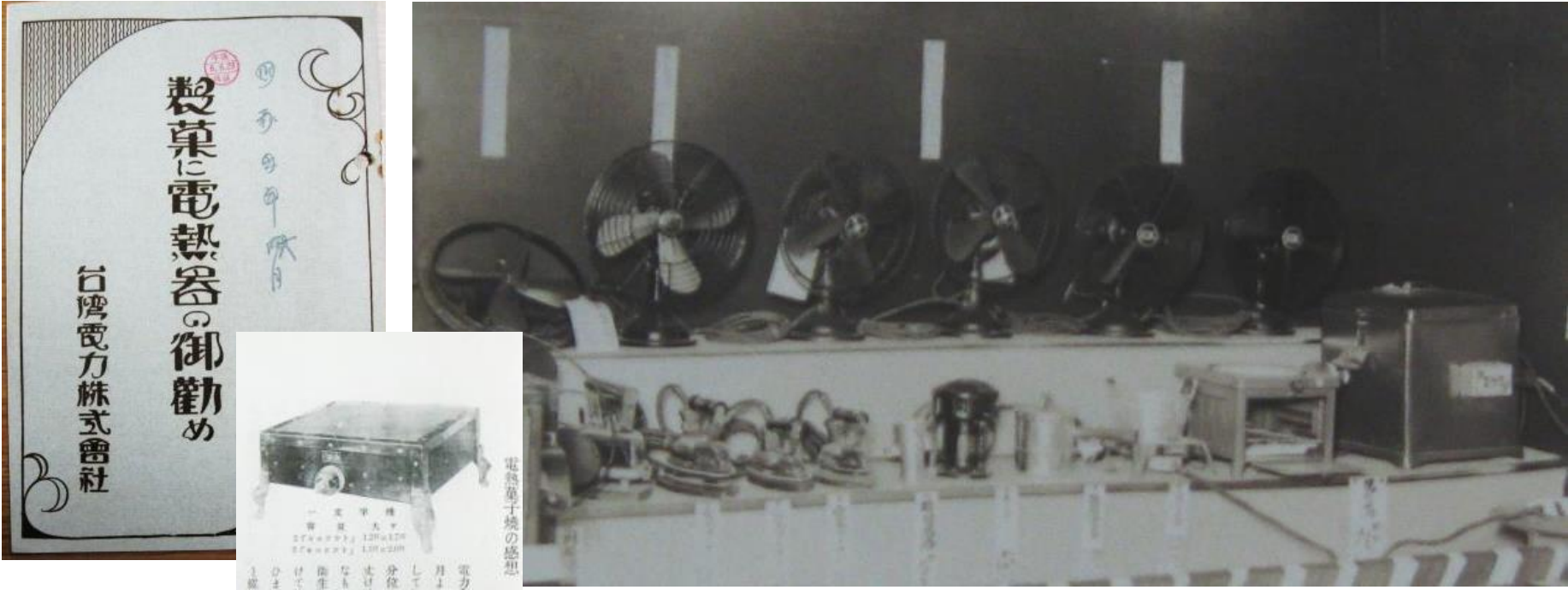
日本人移民が求めていたものは、日月潭発電所建設の工事請負の権益やその経済効果であった



工事再開の資金を調達するためには、台湾に電力の需要があることを示さなければならなかった。

1930 年より電気製品の商品開発には二人の台湾人（朱江淮・柯文徳）職員が携わった

背景には、日本人移民の不景気があり、台湾人のマーケットを開拓する必要があった。



植民地的開発からのアプローチ 植民地台湾のダム開発には、統治する側とされる側の相互作用が存在した。そこには当時の台湾の人たちの思いがあった。しかし、しばしばその思いと、日本人の思惑は異なっていた。この溝が亀裂の種となり、矛盾を深めていった。

『台湾新民報』、「台湾電力資料」（東京大学経済学部資料室蔵）、『台湾電力株式会社営業報告書』